

### 恵みはゼロ円である

#### 我等は乞食である

(エペソ二・八〜一〇)

Time flies Like an arrow. 「タイムバエは矢が好き」もとい「光陰矢のごとし」である。北緯一度の島にあるとある神学校に半ばもぐり込むように入学してから四半世紀、忘れたことも多いが鮮明に残っている記憶もある。その一つが救済論の課題である。タイトルは「救恩為此如何偉大」、救いの恵みの偉大さについて考察せよというのだが字数はたった二千。ポイントを外せばすかさずクリスチャン・デイオール(CD)だ。そこで先輩に尋ねると「太郎兄、『恩典は白賜的』と書けばBマイナスは堅い」とのこと。情報を素直に信じた結果はB+情報に嘘はなかった。

### 一、恵みは「0円」

恵みは賜物である。解りやすく言えばプレゼントである。プレゼントであれば対価は要らない。タダである。現代的に表現すれば「0円」である。しかし私たちの周囲に溢れかえっているのはタダとは名ばかりの「実質0円」の広告ばかりだ。またこの「実質0円」の裏は実に複雑怪奇である。途中で解約しようものなら、たちどころにお金を請求される。だからこれら世俗社会にある「実質0円」はキリスト教的な恵みとは似て非なるものであることを認める必要がある。

「0円」というメタファーはまた宗教改革を理解するうえで有益である。というのもルターの宗教改革はそもそも贖宥状の購入によつて功德を積み、煉獄にいる近親者の魂を浄化出来るという誇大広告に対する抗議に端を発しているからだ。このルターの抗議は罪びとを罪びとのまま義と認める神の恵みをカネで買えるものと喧伝し、さらにはそのカネによつて大伽藍を造営しようという、教会の世俗化に抗うものであった。私たちが生きてるのは五百年前より一層進化した資本主義社会であり、そこにはかつてより一層の拝金主義が渦巻いている。その世界に向けて我らキリスト者は恵みのタダであることを明確に伝えていく責任があるのだ。

### 二、我等は「乞い」

エペソ二・八を読めば人を救うのは恵みを給い、私たちの心に信仰を吹き入れて下さる神の業であることは明々白々である。またつづく九節ではこの救いの恵みは人間の一切の「行い」に依拠しないことが示される。もし人間がながしかの行いをし、神がそれを見、かつ評価して救いだすなら、救われた人は自らの行いを誇る事が出来る。しかし聖書はそうした人の誇りを決して認めないのだ。

ではどういうことになるだろうか。もし人間の側になんら良いところが無いままに神がすくつてくださるのだとすれば、わたしたちに必要なのはただ一つ、このめぐみをめぐみとして受け取ろうとすることである。具体的にいえば、自分がひとからどう思われているかなどは考えないで、ひたすらに神とその救いを呼び求めることだ。認知り顔でギリシャ語をひき、涼しい顔で「キリエ・エレイゾン」などと言うのではない。道端の物乞いよろしく「旦那さま。哀れな乞食にお恵みを」といつて主の前に出ることだ。ルターは自らの死の二日前に「私たちは神の乞食である」と書いたメモを残したというが、徹底的に自分の無力さを知り、その上で神の恵みと憐れみを求める。この姿勢こそプロテスタンティズムの真髄なのだ。

\* \* \*

恵みは0円であり、行いによつて得たのではない以上、私たち「救われた者」には誇るどころは何もない。いや一つだけある。それは私たち霊的な乞食に、帰るところを失った家なき者に霊の糧を与え、魂の家を備えて下さった三位一体の神ご自身である。そしてその神は使徒パウロの口を通して次のように述べる。

「私たちは神の作品であつて、よい行いをするために、キリスト・イエスにあつて造られたのです。神は、私たちがよい行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えて下さつたのです。(十節)」かつては「律法の行い」を鼻にかけ、それにおいては非の打ちどころのないものだと思つて誇らせていたパウロはキリストの出会いによつて開眼し、「良い行い」こそが人生の目的であることに気付いたのだ。恵みを受けたものは、恵みを伝え、恵みに生きる。0円で受けたのだから、0円で伝える。もう一度言う。マモンの跳梁跋扈するこの世において「タダの恵み」を伝えることは全くもつて困難な業である。しかしキリスト者が心底それに生きるなら、その生きざまによつて恵みのことばは真実となる。内的な敬虔に退却することなく、この恵みを社会にもたらす福音使でありたい。